

第5回板橋区緑の基本計画改定委員会 議事録

日 時	令和7年8月27日（水）13：30～16：00
会 場	板橋区役所本庁舎北館9階 大会議室B
出席者	<p>【委員】池邊委員、萩野委員、佐藤委員、山口委員、高田委員、大塚委員、篠原委員、春日委員、水村委員、関委員、西山委員、宮津委員、雨谷委員、内池委員、田島委員、林委員</p> <p>【欠席】なし</p> <p>【技監】波多野</p> <p>【事務局】板橋区みどりと公園課（河島、町田、佐藤、高野、米山、吉田）</p> <p>【受託者】株式会社創建（寺嶋、吉田）</p>
次 第	<p>1. 開会</p> <p>2. 議題</p> <p>（1）第4回板橋区緑の基本計画改定委員会の指摘事項とその回答</p> <p>（2）いたばしグリーンプラン2035（素案）</p> <p>（3）グリーンプラン2035における事業評価指標について（報告事項）</p>
資 料	<p><事前配布資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料1 いたばしグリーンプラン2035（素案）概要版 ・資料2 いたばしグリーンプラン2035（素案）本編 <p><当日配布資料></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料3 第4回板橋区緑の基本計画改定委員会の指摘事項とその回答 ・資料4 第4回板橋区緑の基本計画改定委員会議事録 ・別紙1 ご意見シート

※委員からのご意見・ご質問およびその回答のみを記載している。

次第2 議題

（2）いたばしグリーンプラン2035（素案）（資料1～2）

○委員 第6章109ページの、第1期実施計画で実施する事業と年度別実施内容の表に「(5)緑地・樹木の実態調査」とある。緑地・樹木の民有地と公有地の内訳、さらに民有地の中でも一般と、宗教法人や学校法人などの内訳が知りたい。減少幅が大きいと予想される一般の民有地に照準を当てた対策をしていかなければならない。

また、同ページの「(2)湧水保全地域における湧水の保全」について、湧水と地下水の安全性について昨今非常に危惧されている中で、水質調査を実施したうえで、結果を公表してもらいたい。日常的に地下水を使用している区民をはじめ、非常時などに使用したい区民もいると思うため、ある程度のサンプル地点で実施してもらえないだろうか。

130ページの「(7)公園内における農業スペースの整備」とある。この頃の農業の阻害要因の一つに泥棒やいたづらが挙げられる。公園の中に農業スペースをつくった際の、

防犯上の対策を考慮する必要がある。

⇒事務局

公有地と民有地の正確なみどりの割合については、後日改めて回答する。参考として板橋区緑地・樹木の実態調査（XI）3-6ページによると、都内の土地利用の中では工業用地や空地、農業用地等が減少している。空地のうち、公園・運動場等の減少原因の一つに、成増北第一公園や都立赤塚公園周辺に見られるような樹木の強い剪定により、みどりのボリュームが大幅に減少していることがある。もう一つの大きな原因は、荒川河川敷での大規模な草刈りである。花火大会会場として地面の延焼防止などが目的であったものの、これにより広範囲のみどりが一時的に失われた。今回の調査でみどりの減少は単に樹木がなくなっただけではなく、維持管理の方法によっても大きく影響を受けることが明らかになった。樹冠の拡大とその維持管理について、今後検討を進めていく必要がある。

⇒委員

区がパークマネジメント行う公園を積極的に確保すると共に、池袋の森のように区が買い取る必要があるのではないか。このままでは計画期間満了となる2035年時点では、みどりが大幅に減少する可能性がある。みどりの減少を防ぐためにも、計画にみどりの保全について見える形で盛り込むことが重要である。主体となる個人や法人がみどりを守る意思を示すことにより、みどりが少しずつ失われる虫食い状態を防ぎ、パークマネジメントの効果を高めることができるのではないだろうか。

⇒委員長

区内には国分寺崖線沿いに湧水があり一度開発等で湧水の分断が起きることで、池の水位が下がるなどの影響が出ることを念頭に置いておく必要がある。

みどりの美しいアメリカ西海岸では、1970年代から住宅の分譲・賃貸費用にスプリンクラーの設置費用が含まれるほど、みどりの維持管理が一般的であるのに対し、日本では資金面の問題からグリーンインフラの取組が進んでいない。このままでは今後公園の樹木などの管理が行き届かず、区民のみどり満足度も低下する恐れがある。公園の維持管理には、シンガポールの事例のように、夏の暑さ対策として夜間に剪定作業を実施するなど、労働環境への配慮も必要であり、みどりの維持管理について今後多角的な視点から考えていく必要がある。

○委員

今回の素案は、章ごとにまとまりがあり、読みやすくなったと共に、余裕のあるページレイアウトであるため、読み手となる区民に伝えようとする意識が感じられる。コラムは現行計画に比べると短いものの、計画の内容にリンクして挿入されており親しみやすく、本編を読んでみようという気持ちになった。パークマネジメントも同じ冊子に組み込まれたことで関連性をもたせて捉えられるようになった。

イメージとなる写真が多く、大変わかりやすくなった。特に37ページの葉がなくなり棒状になった「強い剪定のイメージ」が写真として掲載されていた点が印象的である。猛暑時や雨天時に、緑陰がないのは深刻で、少しの休憩もできない状態である。こうした状況は問題であるということ、写真付きで記述しており、評価できる。また、先日

の悪天候により区立公園のサクラの枝が折れたことを契機として、根元からすべて伐採され、緑陰がなくなったのは残念である。古い樹木を伐採するのであれば、代わりに新しい樹木を植えるなどの対応を考えてほしい。また、33ページからの「施策テーマの達成状況と課題」の記述は、区として課題を認識していることがわかる文章であるため、行政の一人歩きではなく、区民とその課題を共有することができる、読みやすい資料であると感じる。

⇒委員長 倒木の迅速な伐採は良いことではあるものの、その後に何をするのが重要である。伐採後に新しい樹木を植えるまでには時間がかかるため、その場所を舗装して広場にしてしまうケースが多いものの、そうならないようにしてほしい。

○委員 この資料を見たときにこれまでの意見が反映されていて嬉しく感じた。
先月、地域の防災に関するワークショップでの年配の方の樹木の捉え方として、倒木リスクの観点から不要との意見が多かった。39ページの「①区民との協働を促すコーディネート体制が未導入」につながる課題であると感じた。また、小学校の校庭でのサクラの倒木による伐採後の木材の活用に目を向けるページがあると良い。

⇒委員長 樹木が防災に役立つ一方で、倒木のリスクもある。樹木医による見落としは倒木に繋がってしまう。近年、日本の自生種が温暖化に適応できず、根腐れを起こす問題も発生している。今後は気候の熱帯化を想定した樹木管理のあり方を考える必要がある。樹木医の多くが高齢であるため、樹木の異変に気付いた際に迅速かつ的確な判断を下せるような体制づくりが急務である。

○委員 今回の素案は章立てがわかりにくい。第4章のタイトル名が「いたばしグリーンプラン2035の計画目標と実施方針」となっており、特に重要な基本方針がタイトル名に出てこない。また、第3章のタイトル名を「これまでの振り返りと課題」といったあいまいな表現ではなく、現行計画の「計画改定の背景と改善のポイント」のように、より明確にしたうえで、第4章の「改定のポイント」を第3章の最後に入れ込んだ方が良い。第4章のタイトル名を「計画の基本方針」とした方が良い。第4章の「施策展開の共通視点」の配置が現在の場所では適切ではないと感じる。

3章3「板橋区の“みどり”に関する新たな潮流変化」で人口見込みについて触れるなど、内容がタイトルと一致していない箇所がある。また、グリーンインフラや協働を強調しているにもかかわらず、その推進や進行管理に関する具体的な仕組み（中間支援など）が抜け落ちている。

現行計画90ページにあるようなイラストを基本方針の最初に掲載することを考えてほしい。ほかにも、エコロジカルネットワークやみどりのエリアプランに関する図も掲載してほしい。

パークマネジメントの範囲について、施策体系図では、実施方針の一部のみがパーク

マネジメントガイドラインの対象になっているように見える。パークマネジメントは基本方針Ⅰの実施方針に含まれる、生物多様性の向上など、緑地全体に関わるものである。グリーンプランの実施方針は、すべての公園にも適用できるのではないか。

⇒委員長 今回の素案でパークマネジメントの対象が、一部の実施方針に限定されていることに疑問を感じる。本来パークマネジメントは緑の基本計画全体に関わるべきものであり、区民は一部しか扱わないことに対して不自然に感じるのではないだろうか。区が協働を謳う以上、より包括的なパークマネジメントを考えてほしい。

行政職員向けではなく、区民向けの計画であることを意識する必要がある。54ページの内容に至るまでの工程が長すぎるので、構成を変更し、新しい基本方針を明確に提示してほしい。

現行計画では、計画のテーマである「みどり」でつなぐ《ひと・まち・みらい》をイメージさせる図がある。イラストは現行計画では実現できなかった目標を今度こそ達成するために不可欠な要素である。

⇒事務局 より読みやすい構成にするという今回の計画改定の目的を達成するため、今後は委員の意見を参考にしながら、構成を調整していく。細かい点についても、改めて議論の場を設けて検討したい。

⇒委員長 区民にとってわかりやすく、工夫して作成した箇所が強調される計画にしてほしい。

⇒事務局 課題を提示した後に基本方針があるという構成を前提とし、盛り込みすぎている部分を削除するなど、読み手である区民がわかりやすい計画となるよう工夫する。また、現行計画の反省を踏まえ、具体的な事業量を年度別に明記する。

現行計画90ページのイメージ図について、イラストを用いるかどうかは検討するものの、グリーンプランの改定により、区民が将来どのような恩恵を受けられるのかがわかる表現は必要であると考えている。

パークマネジメントが、グリーンプランの一部の施策のみを抽出したものではないことを明確に示したい。

⇒委員 重要なのは、グリーンプランの基本方針を明確に提示し、それを区民に理解してもらうことである。現行計画にあるイラストのような、区民自身に何ができるかを考えてもらえるイラストを用いるなど、基本方針が見える化してほしい。

推進体制についても、協働を今回の改定のポイントとしている以上、これまでのPDCAを繰り返すだけでなく、協働を実現するための仕組みを盛り込んでほしい。

⇒委員長 板橋区民の現状は、自分たちが何をすべきかがわからず、とりあえず区に苦情や要望を伝えるだけになってしまっている。しかしこうした状況を変えていかない限りパークマネジメントは成功しない。区内3か所の開発により、新しく移り住んでくる住民が増えるので、そうした人たちと旧来の住民とが自分たちの手でみどりに関わろうという気持ちになれるような取組を区には考えてほしい。

○委員 第3章に「これまでの振り返りと課題」という内容があり、項目立てとしては良いと感じたものの、具体的に何を振り返っているのかがわかりにくかった。おそらく「みどりに関わる社会情勢の変化」について振り返っていると推測できるものの、何を振り返るか、最初に読み手に分かりやすく示してほしい。

まちづくりの課題の一つとして、区民と協働を促すコーディネート体制が未導入であること等、ひとに関する課題が大きいことがわかった。区民にただボランティアへの参加を呼びかけるのではなく、面白さや楽しさといったポジティブな感情を持ってもらい、自発的な行動を促す仕組みが必要ではないか。

⇒委員長 これまでの取組で最も欠けていたのは、住民自らが行動を起こすことである。今回の計画のねらいは、自分には何ができるのかを考え、ポジティブな動きを促すことである。

○委員 猛暑で命に関わる気候となっている以上、緑陰の重要性について施策に盛り込んでほしい。緑被率の減少原因として剪定や伐採、草刈りが挙げられているものの、緑陰の減少を問題視した場合、草地の裸地より、樹冠の減少を取り上げるべきである。37ページの③に緑陰の減少を問題視する記述を盛り込み、40ページ「計画全体を通じた推進に関しての課題」の1つ目「グリーンインフラとしての課題」に緑陰の重要性やみどりのネットワークが分断されている現状を書いてほしい。施策展開のテーマとして掲げている「みらい」「まち」「ひと」のうち、「まち」の視点だけが抜けている。グリーンインフラと協働に加えて、ウォークアブルを視点として盛り込んでどうか。「まち」の部分ではウォークアブルの視点から、緑陰とみどりのネットワークを重視し、みどりの質についての現状と将来のイラストを加えて具体的に示すことで、計画の方向性が伝わりやすくなる。また、緑陰やみどりのネットワークについては、実施方針として新たに項目立てするか、「拠点間を結ぶみどりの創出」の項目に挿入するかは検討が必要である。特に緑陰は、街角のみどりや公園のみどりなど各地点の視点から語られると良い。

⇒委員長 ウォークアブルの考え方を盛り込む場合、ウェルビーイングに繋がるような「ひととみどりの共生」などの言葉を用い、まだできていない課題として表現すればよい。

パークマネジメントには、「楽しい公園」、「美しい公園」、「綺麗なまちなみ」といった言葉がほとんどない。公園や街路樹があったとしても、樹冠の最大化による緑陰が確保されているなど、みどりのもつ機能を果たしていなければ意味がない。

ウェルビーイングを重視した計画であるのであれば、例えば公園の一部にコミュニティガーデンを設けるなど、住民が関わることのできる仕組みが必要である。また、歩きたくなるまちは、楽しくて美しくなければ歩きたいと思わないので、住民が板橋区に住みたい、板橋区で子どもを育てたいと思える、美しい景観やたたずまいに関する言葉を盛り込んでほしい。

⇒事務局 グリーンインフラの推進にあたって、行政だけではなく、多様な主体が協働して取り

組んでいきたいという考えの中で、樹冠の拡大の重要性について丁寧に記述する必要がある。委員の意見を踏まえて、必要な場所に必要な言葉を入れると共に、原案提示の際には具体的な事業量を書き込む。

構成のつながりがわかりやすい構成にしていく必要がある。

グリーンインフラと多様な主体については、一部ではなく、施策共通で取り組むべきであるとの庁内意見もあるため、現行計画からバージョンアップさせた、わかりやすい表現が必要であると考えている。また、ウォークブルの視点も入れ込みたい。

「楽しい公園」、「美しい公園」といった言葉を盛り込むことで、区民が未来のいたばしのまちにワクワクしてもらえるよう、板橋公園の改修等を例えばコラムで紹介をするなど、区民の関心を引く工夫をする。行政が一方的に管理するのではなく、協働の視点を取り入れ、区民が柔軟に公園を使ってもらえるよう、計画に対する区民の意識を変えられると良い。

⇒委員 42ページのみどりの質に関する内容、イメージ共に充実させることで全体が見やすくなる。

○委員 素案には、区の花であるニリンソウに関する説明がほとんどない。都内最大級のニリンソウの自生地である赤塚・成増エリアに関する説明がなく、非常に残念である。

⇒委員長 ニリンソウのカラー写真とともに、説明を加えていただきたい。

○委員 構成について、計画の全体像を示す58ページの施策体系図が非常にわかりやすく、これがより目立つ位置にあると良い。現行計画では、施策体系図の次に施策一覧があり、そこではページ数が掲載されており、読みたい箇所を探せるようになっていた。区民は前回の反省などよりも、具体的な取組を知りたいのではないかと思うので、読みやすさを重視してほしい。

実施方針と実施施策の内容が別の章となっており、どのような方針のもと、どのような施策を実施するのかがわかりにくい。

実施方針のページについて、社会状況の変化や国や都の動向の内容のフォントを小さくし、具体的に何を実施するのかの説明を充実させてほしい。社会状況の変化については、第3章1「みどりに関わる社会状況の変化」のアイコンを活用できるのではないか。

⇒委員長 計画は、区民が読みたいと思えるものでなければならないので、ビギナーズ講習会や公園を使いこなす仕組みづくりといった言葉を盛り込んだり、現行計画のように何がどこに書いてあるかページ数を記載したりと、読み手の視点を重視した構成を考えてほしい。

○委員 計画素案は現行計画と比べると余白がなく、どこに何が書いてあるかがわからない。専門家ではない一般区民でも読みやすい計画にすると共に、レイアウトとして現行計画

の33ページのように図と文字が対応する形で左右のページに並べるなどの工夫がほしい。

「楽しい公園」といった言葉を入れたり、板橋区にはどんな公園があるのかを書いたりして、「人を呼べる公園」をつくっていく必要がある。

○委員

第6章の書き方は行政側の都合であり、非常にわかりにくい。行政にとってはわかりやすいのかもしれないが、区民に理解してもらうことが重要であるため、書き方を再考してほしい。

板橋らしさを演出するニリンソウについて、崖線の話のある7ページや、コラムで紹介してほしい。

14ページからの「板橋区の地域ごとのみどりの特徴」が文字のみの記載であり、写真がほしい。

21ページにヒートアイランドの話があり、豪雨災害に対応する雨庭についても盛り込み、施策として挙げられると良い。

緑被率について、東京都の緑の総量としてこれ以上減らさないことを目標（東京都のみどりの取組目標）としてみどりの維持を目標としているのであろうが、誤植と捉えられかねないため、理由を冒頭で説明した方が良い。また、緑被率だけではなく、緑視率の視点も取り入れてはどうか。

現行計画30ページ「みどりの基本構造とエリアプラン」の項目が素案にはない。これはどの地域に重点を置いて何をするのかが一目でわかるため、次期計画にも加えてほしい。ここには、エコロジカルネットワークだけではなく、世界のトレンドである人のネットワークやみどりの回廊が含まれると良い。

⇒委員長

専門家の立場から言うと、みどりの基本構造とエリアプランがないようなものは、施策集であり、緑の基本計画とは言えない。読み手である区民がワクワクしたり、こんな場所に行ってみたいと思わせたりできる形にしてほしい。厳密に言えば、重点地区を定めて、みどりを保全する姿勢を明確にするなど、見直しをしてほしい。イラスト等を用いて立体的に表現することも重要である。

以上